

事業と運動と地域文化

「事業」からしか
見てもらえない

新年度となり、異動や新採用となった方はどのように新しい組織に、環境に、事業に馴染もうとされているでしょうか。長年続いている事業であれば、新しく担当となった方は前任者から引継ぎを受け、ミスのないように事業を引き継ぎ、継続することとて手いっぱいの場合がほとんどだと思います。

佐々木は今でも自分の気持ちの中で納得できない事業と出合ったとき、そもそもこの事業が何を目指し、なぜこの事業をしなければならぬのか、どうして予算がつ

について、説得する術を持っていなかったと反省せざるを得ません。

運動の推進母体の必要性

2018（平成30）年3月、震災直後から実施、継続してきた陸前高田市保健医療福祉未来図会議は、これまでの役割を終え、丸7年間86回の開催をもって一区切りすることとなりました。今後は名称から保健医療福祉を外し、「陸前高田市未来図会議」として再スタートしますが、これまでのように毎月行うという形ではなくなりました。

この未来図会議は、11（平成23）年3月末から計画や事業として始めたものではなく、当初は地域包括ケア会議という名前で、そのときの必要性にかられて動き出したものでした。震災直後の陸前高田市はまちそのものの被災により、行政機能、都市機能を失い、文字通り機能不全状態に陥り、被災状況も、人の動きも、支援の実際も分からない状況になっていました。その状況を打開するため、医療や保健、福祉の分野の情報共有化、一元化を行い、被災地できている今とこれから（未来）を考えよう

たのか、事業の根拠が正しいのか、何のために計画に入っているのか、などを自問自答しているうちに前に進めなくなることがよくあります。岩室はスクリーニングにさえもなっていない前立腺がんPSA検診という事業を、評価検証することなく実施している地域保健の現場で「PDCA」という言葉が当たり前のように使われることに違和感を禁じえません。

この二人が東日本大震災直後から陸前高田市に関わり続ける中、地域の一人一人が少しでも元気になれるまちづくりは、行政が抱えている「事業」だけでは実現できないという事実と常に向き合い、未来図会議で「協働」「ヘルスプロモーション」「ソ

として始めた会議でした。被災した年の年末に策定した復興計画の中に会議が位置づけられ、数年後でしたが実施要領も作られ、結果として計画や事業に組み入れられる形となったことは、市民だけでなく市内外の支援者、活動者とながら続ける上で重要なことでした。

ただ、平時の健康づくり計画等にはこのような会議は位置付けられておらず、事業にもなっていないため、このような会議の意味が感覚的に理解できない人が増え、気が付けば一区切りを迎えることになりました。なぜ、未来図会議が続いたのか。逆に、なぜ今、終焉を迎えたのかを考え続けた結果、たどり着いた結論は、未来図会議は「はまかだ運動」の推進母体だったということでした。事業ではない運動を進めていくためには、人と人がつながり、運動の目標や課題を共有し続ける場が必要で、その役割を未来図会議が担っていました。

運動を計画から事業に

もともと陸前高田市はじめ気仙地区にあった「はまっつけらいん（集まっつけらいん）」（お話ししましょう）」

岩手医科大学
衛生学公衆衛生学 助教
陸前高田市はまかだ運動推進
アドバイザー

● 連絡先：〒028-3694
岩手県紫波郡矢巾町西徳田 2-1-1
019-651-5111（内線 5775）



佐々木亮平
(ささき・りょうへい)

ヘルスプロモーション
推進センター
(オフィスいわむろ)
陸前高田市ノーマライゼーション大使

● 連絡先：<http://iwamuro.jp>



岩室紳也
(いわむろ・しんや)

シャルキャピタル」といったことを繰り返して確認し続けてきました。しかし、7年、経過した今、国は復興モードから通常モードへの変換を求め、復興関連の予算や事業をバツサリ切ってきています。それも無理からぬことで、陸前高田市に入り続けている佐々木も岩室も、「事業」とそれを裏付ける「予算」という枠の中から「地域」を見てもらえないという現実に向き合っています。7年間という時間があつたにもかかわらず、われわれはいまだに既存の事業だけでは地域の人たちを元気にできないこと

という文化がもつて、未来図会議で「はまっつけらいん、かだっつけらいん運動（通称はまかだ運動）」が生まれました。カール・ロジャーズの「人は話すことで癒される」に学び、今回、陸前高田市が策定した自殺対策計画のポピュレーションアプローチの柱となっている運動です。

はまかだ運動は、12（平成24）年12月に復興予算の中からのぼり旗やステッカーやバッジを作成し、始まりました。ただ、「はまかだ運動」について行政の中で定めたものがなかったため、事業でもなければ、担当もない状況が続いていました。この間、はまかだ運動の意義を理解した人たちが、ノーマライゼーションという言葉のいらな

いまちづくりアクションプランや、第二次の健康増進計画の中にはまかだ運動を盛り込んだものの、具体的な事業として動き出すことを打ち出せずにいました。
17（平成29）年度は地域で活動している一般社団法人やNPO、市民と一体になって作り上げた「はまかだパンフレット」や、生活支援コーディネーターが中心となって収集した人と人がつながり、はまかだをしている「はまかだスポット」を集めた「はまかだスポットガイド」といった成果物も

完成しました。このように一定の成果は挙げたものの、「はまかだ運動」には正式な実務担当がいなかったため、なし崩しの風前のともしびになっていました。そのことに危機感を持った保健師が自殺対策計画の中に記載し、「はまかだ担当」を明確化し、実施要領を作った結果、「運動」としての本質的な理解はさておき、結果として市役所内で計画に位置付けられ、事業としてもあらためて認知される状況を作り出すことができました。

佐々木と岩室が月1回はペアで入り続けてきた陸前高田市への伴走体制も、2018（平成30）年4月から大きく変わりました。これまでは二人とも同じ立場のアドバイザーでしたが、これから佐々木は月2回程度定期的に入り続ける「はまかだ運動推進アドバイザー」となり、この運動がぶれることなく、着実に推進されるように一緒に考え続ける予定です。

事業・運動・地域文化・経験の融合

一方で、岩室は必要に応じて関わる「ノーマライゼーション大使」に専念します。陸前高田市が掲げている「ノーマライゼー

ションという言葉を生かし、ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくりや、はまかだ運動が一体的に展開されてきました。市民、関係機関、行政で運動の目標と課題がぶれないよう、共有化され続けられる場として必要不可欠だった未来図会の自発対策計画の活用、はまかだ担当の明確化。このように文化・運動・事業・計画を意識的につなげることで、最終的には一人一人が元気になる地域づくりが推進されていくようです（図）。

風化して当たり前になる

震災から7年。とすると、悪い意味で使われがちな「風化」ですが、「徳により教化される」という意味もあるそうです。風や空気のように当たり前になる、日々の生活の中であらためて語られなくとも自然に当然のように理解されている状態、という意味合いのようです。戸羽太市長が掲げられておられる「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり」に相通じるものがあるのと思いました。

事業から運動へ、そしてそれが文化とな

ションという言葉のいらないまちづくり」という理念、目標がどれだけ浸透しているのか、運動としての広がりになっているのかを確認、評価したいと考えています。いろんな人とはまかだをし続けていると、運動を広げるためのヒントはいろんなところに転がっているものです。

18（平成30）年3月をもって閉局となった陸前高田災害FMのパーソナリティの方にご挨拶に伺った際、「マイノリティの集まりがマジョリティーですよ」とサラッと言われ、ドキッとしました。陸前高田災害FMは11（平成23）年12月の開局以来、6年あまりの間、国や市の支援を受け、主に陸前高田市民を対象に情報発信をし続けてきました。佐々木と岩室も12（平成24）年3月からこれまで80回以上、陸前高田市を元気にする番組を発信し続けてきました³⁾。

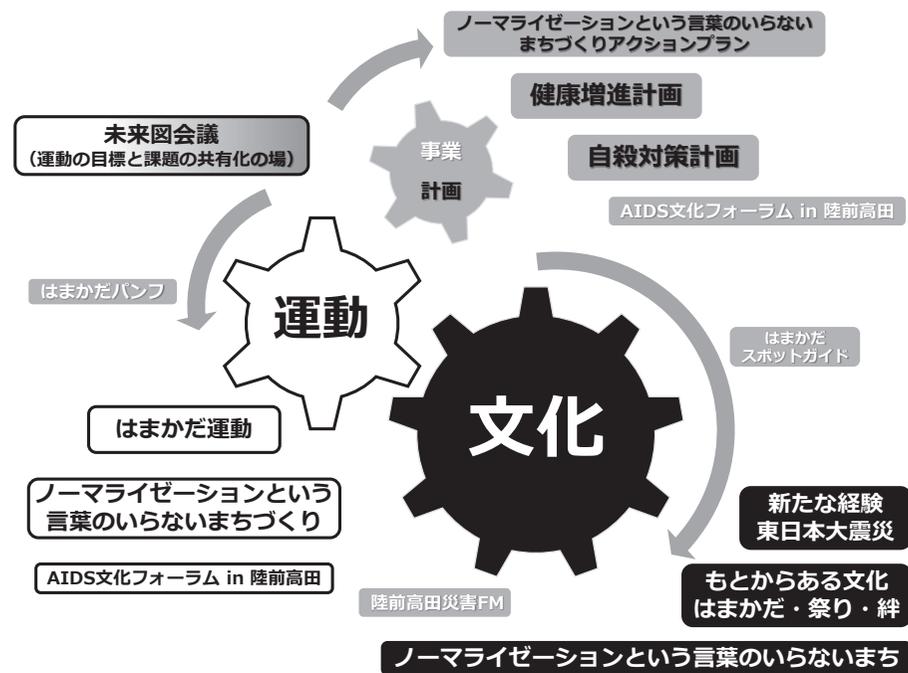
大事にしてきたことは、歴代のパーソナリティの方々とはまかだを通して、ラジオの向こう側にいるさまざまな背景、状況にある市民の皆さんのことを常に考え続けることでした。家も、家族も、仕事も流されてしまった「見える被災」をした方々の一方で、家は直接的な被災していないかの

り、気がつけば風化され、地域の中で当たり前前の、ノーマライゼーションという言葉のいらないものになっていく……そんな風につながっていきけるようにこれから行動し続けたいと思います。

文献

- 1) 岩室紳也．自治体における任意型がん検診の現状と課題～PSA検診はスクリーニングになっていないうえに、過剰治療となっている～．公衆衛生 82(2),2018,105-111.
- 2) 佐々木亮平,岩室紳也．災害を支える公衆衛生ネットワーク 東日本大震災からの復旧、復興に学ぶ・9. ころのケアとは ポピュレーションアプローチの視点から．公衆衛生．2012,76(12),61-66.
- 3) <http://healthpromotion.a.la9.jp/saigai/rikuzentakata.html>
- 4) 佐々木亮平,岩室紳也．未来図を描く公衆衛生活動in陸前高田④【最終回】公衆衛生は触媒産業．公衆衛生．2014,78(3),188-192.

図 事業から運動へ、そして文化にしていく風化の流れ



ように見えても、実際には多くの友人、仲間、仕事を失っている「見えない被災」の方々もおられます。性、年齢、住んでいる場所といった多様性のすべてに思いを寄せ、それは不可能ですが、できるだけ寄り添う努力をしながら、収録には多種多様な方々に来ていただき、台本やシナリオ無しで、そのとき感じたことをお互いに共有し合いながら、はまかだをし続けた番組（事業を通じて運動）でした。

AIDS文化フォーラム in 陸前高田⁴⁾も災害FMを通じて繰り返し発信し続けていました。役所サイドの予算から見れば思春期保健事業の一つですが、見方を変えれば多くの人が巻き込まれる、「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり」という運動の一環でもあります。

災害FMに登場してくださったすべての方々にその人なりの特性があり、一人一人が尊重されるマイノリティであったことが実感できたからこそ、市民を代表してパーソナリティの方から「マイノリティの集まりがマジョリティー」という言葉につながったと考えています。

陸前高田市ではもともとあったはまかだという文化、東日本大震災がもたらした経